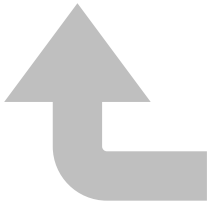


「レナードの朝」から対話と生活の質を考える



著：神山 努
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

「レナードの朝」という映画を私が観たのは学生の頃でした。私の父親は映画がとても好きで、家で、時には映画館に連れられて色々な映画を観ました。その影響か、学生の頃から私も映画を観る習慣ができ、学生で時間があつた日には1日で複数本の映画を観たこともあります。

それはさておき「レナードの朝」のあらすじについて、主人公のレナードは嗜眠性脳炎によって、30年間半昏睡状態で、意識はあっても話すことも身動きもできません。しかし新任ドクターのセイヤーは、レナードに試験的な新薬を投与し、機能回復を試みます。そしてある朝、レナードは奇跡的な「目覚め」を迎える、というお話です。この目覚めからどういう展開になり、映画ではどのような結末となるか、それ以上のネタバレは止めておきます。

私は大学で障害について学んでいましたが、「レナードの朝」を観たのはそれとは関係なく、旧作おすすめを紹介する何かで見てなんとなく選んだのだと思います。見終わった後も特に障害支援と紐づけて考察もしませんでした。思い返すと、学生の頃は深く考察する習慣はなく、ようやく最近になって物事を考えるようになった気がします。それでも心に残り、対人援助をレポートする1本の映画と言われ、「レナードの朝」を思い出しました。

学生の頃から何年も経ち、障害がある人々に対する教育や支援について実践や研究を重ねた今に改めて考察すると、試行錯誤、生活の質というキーワードでこの映画を思い出したのかなと思います。

支援にみる「対話」

ドクターのセイヤー氏は、レナードを含めた嗜眠性脳炎により昏睡状態にある人々への機能回復のため、映画の冒頭から試行錯誤します。それは昏睡状態にある人々のある日の様子がきっかけに、新薬の投与をしてはその結果を評価して再検討します。

障害がある人々に対する支援では、PDCA サイクル（Plan-Do-Check-Act のサイクル）が重要とされています。障害がある人々への丁寧なアセスメントから支援計画を立て、その計画に基づく支援を実践し、その結果を評価、評価結果に基づき計画の再検討というサイクルです。支援実施前のアセスメントも重要ですが、それと同じくらい重要なのは支援実施後の評価です。評価結果から支援計画を再検討し、修正を重ねることで個に適した支援計画となっていきます。支援対象が音声言語を発しない場合、評価からの計画再検討は、本人との「対話」のように思えます。

この、話し言葉を交わすことも交わさないこともある、評価からの支援再検討の「対話」のようなサイクルの重要性を忘れないようにしなければと思います。支援の経験を重ねていくと、ある程度一般化した支援対象者の属性で、支援計画を判断してしまいそうになります（〇〇障害がある小学生ならこうした支援など）。しかし個々のニーズに即した支援が基本になります。丁寧なアセスメントから支援計画を立てることも大事ですが、その時点ではその支援計画はその対象に適しているか、仮説の段階と言えます。支援計画を実施して評価する「対話のようなやり取り」を忘れないようにしなければと思います。

生活の質の向上のための環境調整

そして支援対象者の生活の質（quality of life; QOL）の向上を追求することも映画から考えさせられます。例えば、発達障害がある人々には環境を整えることで本人ができること、やりたいことが実現できます。しかしこれに対して様々な立場から、「その環境調整がないとできなくなる、それは意味があるのか？」と問われます。もちろん意味あるでしょう。

本人たちに有効な環境調整が見つければ、それをより広いレベルの社会の中に広げていくことで、本人たちが社会でできることは増えていきます。望月昭先生の援助—援護—教授からも同様の考えを受け取れます。そしてそうした条件が整った中で本人たちができることからやりたいことを選び、実際に行っていくことが本人たちの生活の質の向上だろうと思います。

様々な実態把握から本人たちが求めているだろうことを推察し、それを支援者と言われる周囲の人々が与えることではなく、本人たちが求めていることを自らで選び、取りに行くこと、その中で必要な調整を周囲と「対話」して進めていくことこそ、「支援者」に求められることなのだろうと思います。

本稿を書き終えて、改めて「レナードの朝」を観てみようと思いました。今ならではの発見があるかもしれません。

参考

レナードの朝 ソニーピクチャーズ公式 <https://www.sonypictures.jp/he/702>

海保博之（監修）・望月昭編（2007）対人援助の心理学．朝倉書店

—つづく—